

イタリアの旅

酒井 寿紀

目 次

はじめに	6
ローマ	7
きれいになったローマ	7
ローマ人の風呂とは?	8
ギリシアがお手本	9
天国への階段	11
不便になった(?) ヴァティカン美術館	12
城壁と城門	13
ヨーロッパ人にとってのローマ	14
アッシジ	16
途中下車の旅	16
道に迷ったおかげで	17
サン・フランチェスコ教会	18
ベルージア	20
山の上の町	20
中世そのままの街並み	20

フィレンツェ	22
テンカンの学会とぶつかる	22
お化粧中のドゥオーモ	23
前売券でウフィッツィ美術館を見る	24
フラ・アンジェリコの修道院	24
恐怖の三段腹	26
裏通りのスケッチ	28
「百人の乞食の食堂」	28
ピサ	30
斜塔の町	30
露天商の列	31
ボローニャ	32
もうひとつの斜塔	32
バッグとドライ・トマト	32
フェラーラ	34
月曜日は駄目よ！	34
足裏マッサージに最適	35

ヴェネツィア	36
車がない町.....	36
「海の都の物語」.....	37
沈みゆく町.....	39
ティントレットの美術館.....	40
イタリアのウナギ.....	41
スケッチも楽ではない.....	43
ヴェネツィア語？.....	45
英語が商売道具.....	45
小包の箱はどこで売っている？.....	47
パドヴァ	49
クリーンルーム並みの礼拝堂.....	49
おわりに	51

本書にはスケッチ、写真は含まれていません。ご覧になりたい方は下記ウェブサイトをご覧ください。

<http://www.toskyworld.com/kaigai/italy/italy.htm>

Copyright (C) 2001, Toshinori Sakai, All rights reserved

はじめに

イタリアには今迄に仕事で4回行ったことがある。しかし行ったのは、ローマとミラノと、オリベッティの発祥の地であるイヴレアという北イタリアの小さな町だけである。フィレンツェとかヴェネツィアには行ったことがなく、前から一度行きたいと思っていた。

そして、最近塩野七生さんのイタリアの歴史を題材にした小説を何冊か読んで、ますます行ってみたくなった。

そこで、昨年(2000年)の10月に、女房と二人でイタリアに行ってきた。

ホテルをあまり変えるのは大変なので、宿泊地はローマ、フィレンツェ、ヴェネツィアの3個所にして、3泊ずつすることにした。

主としてこれらの町を見たいと思っていたのだが、地方の古い小都市にも興味があったので、これらの町を足がかりにしていくつか訪れることにした。

ローマからフィレンツェに鉄道で移動する日には、ちょっと遠回りになるが、アッシジとペルージャに立ち寄ることにした。また、フィレンツェからヴェネツィアに移動する日には、ボローニャとフェラーラで途中下車することにした。

またフィレンツェからピサに、ヴェネツィアからパドヴァにそれぞれ日帰りで行くことにした。

9泊11日で9都市を見てまわったので、かなり忙しかったが、今迄知らなかったイタリアのいろいろな面を見ることができた。

以下はその時の話である。

ローマ

きれいになったローマ

去年は、西暦 2000 年でミレニアムの年だった。そのため、ローマには世界中からキリスト教徒が集まって来ていた。その中には、私のように、キリスト教とは関係ない野次馬も相当いるのだろう。そのためどこも旅行者でいっぱいだった。

それに備えてローマは、大変な金をかけて受入態勢を整えていた。

ヨーロッパ行きの日本航空のステュアデスが、

「ローマのテルミニ駅は見違えるようにきれいになりました」

と言っていた。私は前のテルミニ駅を知らないので比較はできないが、行ってみると確かに近代的できれいな駅になっていた。

見かけだけでなく、座席指定の予約をするところは、待ち順の番号札を発行機から取って、番号が呼ばれるまで椅子に座って待っていればよいようになっていた。日本の銀行と同じで、長時間立って並ばなくても済む。

外観だけでなく、こういう「しくみ」の面でもよくなっていた。

ローマの空港に着いた時は夜も遅かった。市内へ行くタクシーの窓から見ると、ローマの市街に入る城門やフォロ・ロマーノの遺跡がライトアップされていて大変きれいだった。これは今年だけなのだろうか？ それとも今後ずっと続けるのだろうか？

町を歩いていると、そこここの空き地にインフォメーション・センターや医療センターの仮小屋が設けられていて、旅行者の対応に大変な金をかけている様子が伺えた。

ローマ人の風呂とは？

私が前にローマに行った時に、非常に不思議に思ったものにカラカラ浴場がある。こんなに馬鹿でかい建物が浴場とは！現在は天井がないが、昔はどうなっていたのだろうか？ いったいローマ人にとって風呂とは何だったのだろうか？

そこで、今回はローマに着くと真っ先にテルミニ駅前のディオクレティアヌスの浴場に行った。これもカラカラ浴場と同じように大変大きい建物だが、やはり傷みが激しく、今は天井もなく、昔の姿はよく分らない。

しかたがないので、ガイドブックを買って、帰国後読んでみた。まだ分らないこともあるが、それを読んでだいぶ分った。

ディオクレティアヌスの浴場の敷地は、現在は一部道路等になって狭くなっているが、もとは約 14 万平方メートルあったという。日比谷公園（約 16 万平方メートル）に近い広さだ。そして建物は、幅 250 メートル、奥行 180 メートルの大きさだったという。日本の国会議事堂の幅が大体 200 メートルぐらいなので、幅だけでもこれよりひとまわり大きい。

建物の中には、面積が 2,500 平方メートルという、馬鹿でかい水泳用のプールがあったという。プールの長さは 100 メートル近くあったようだ。この部分にはもともと屋根がなかった。

この屋外プールの周りには、室内プールとか、冷水の風呂とか、着替え室とか、たくさんの部屋があったようである。その部屋のひとつには床暖房が設けられていたという。大きいサウナ風呂のようなものだったのだろうか？

同時に 3,000 人が利用できたという。これはカラカラ浴場の 2 倍だそうである。

また建物の一部には図書館もあったという。

どうもこれは、浴場というよりも、スポーツセンター兼ヘルスセンター兼図書館、言い換えれば、総合レクリエーションセンターのようなものだったようだ。ローマ市民にとって最大の娯楽施設であり、また社交場だったのではなかろうか？

前にフランスのアルルに行った時、ローマ時代の遺跡として、闘技場、野外劇場の他に浴場があるのを知って驚いたことがある。ローマ人にとっては浴場は闘技場、劇場とともに、市民生活に必要な施設だったようだ。

しかし、私にはまだまだ分からないことが多い。この中では水着のようなものを着けていたのだろうか？ それとも素っ裸だったのだろうか？ そして、男女混浴だったのだろうか？ それとも、別々の部屋に別れていたのだろうか？ そもそも、女も入れたのだろうか？

ギリシアがお手本

テルミニ駅のすぐ前に、ローマ国立博物館がある。この建物はマッシモ家の宮殿の跡だという。

ここにはローマ時代の彫刻がたくさん陳列されていた。

ローマの皇帝の像が数多く並んでいる。写真で見たことがある円盤投げの選手の像もある。

そしてギリシア神話の神様が大勢いる。展示物についている名前もギリシア神話のゼウス、アフロディテ、ディオニュソス等である。

ローマ神話でこれらの神に当たる、ジュピター、ヴィーナス、バックスではない。私にはギリシアの彫刻とまったく区別がつかない。

あとでガイドブックを見ると、ギリシアの彫刻のコピーも多いようだ。あの有名な円盤投げの選手も、完全な姿をしているものは、紀元前 5 世紀のギリシアの彫刻を紀元 2 世紀のローマ人がコピーしたものだという。

ローマ人はギリシアの美術品のコピーから始めたのだ。日本人が中国の作品のコピーから始めたのと同じである。だから、ローマの初期の作品が、素人には、ギリシアのものと同じく区別がつかないのは当たり前なのだ。

多分これは美術の世界だけでなく、文学や哲学の世界でも同じなのだろうと思う。ローマ人にとってギリシア人は先生だったのだ。

前に「プルターク英雄伝」を読んで驚いたことがある。ブルトゥスは、フィリップの戦いで敗れて自殺する直前に、ギリシア語で思い出話をしたというのだ。この人はギリシアの詩の暗誦が得意だったという。それにしても、戦場で死ぬ直前にギリシア語で話したということは、普段からギリシア語を自国語と同じように使いこなしていたのだろう。

そしてこの人がギリシア語で話したということは、聞く方もギリシア語が分ったということだ。

プルタークが特別に驚いていないところを見ると、ローマの教養人にとってギリシア語を話すことは当たり前だったのだろう。

ローマの文化はギリシアの文化をお手本にしたものなのだ。ギリシア人の偉大さを、このローマ国立博物館で改めて感じた。

天国への階段

ヴァチカンのサン・ピエトロ寺院はミレニアムの来訪者で大変な人だった。18年前にここへ来たときは、1月末の真冬だったせいもあるが、まったく閑散としていた。大変な違いである。

胸に、「英語」とか「ドイツ語」とか書いたゼッケンを吊るしたヴォランティアのガイドが大勢いて案内をしていた。

行ったのは木曜日だったが、ミサをやっていた。今年は毎日やっているのだろうか？

ドームの丸い屋根をクーポラというが、その上に登るエレベーターがあったので、登ってみることにした。ところが、エレベーターで行けるのはクーポラの半球形の部分の下迄で、そこから上は階段を登らなければならない。

下から見るとたいしたことはなさそうだが、これが大変な長さで、石造りの狭いトンネルのような階段を延々と登らされた。全体の高さが136メートルだというので、この部分だけで40メートルぐらいありそうだ。10階建てのビルと同じぐらいである。

途中で、前を登っていたイギリス人がドイツ人らしい太ったおばちゃんがフーフー言っているので、

「Going to the Heaven. (天国へ行くところだね)」

と言うと、

「Yes. Nearer to the Heaven. (そう、天国が近づいてきたわ)」

と言ってにっこり笑った。

まさに、「天国へ行くのも楽ではない」という感じだった。それを悟らせるためにこういうものを作ったのかも知れない。

しかし、クーポラのでっぺんにたどり着くと、そこからはローマの市街が一望のもとに見渡せて素晴らしい眺めだった。

心臓と脚に問題がない方には、ヴァティカンへ来たらこのクーポラに登ることを是非お勧めしたい。

不便になった（？）ヴァティカン美術館

サン・ピエトロ寺院の隣りにヴァティカン美術館がある。私は前にも見ているし、全部見るのは大変なので、今回は女房にシステリーナ礼拝堂だけ見てもらおうと思った。ところが、そうはいかなかった。

システリーナ礼拝堂はヴァティカン美術館の入口から一番遠いところにあるので、そこまで歩いて行かなければならない。それはしかたがないのだが、今はまっすぐに歩いて行けないのだ。完全に順路が決まっていて、2階に登ったり、1階に降りたりして、途中の部屋を全部見ないとたどり着けないようになっていた。その上、人がいっぱいいて速く歩くこともできず、予想外に時間がかかってしまった。

実は私は、システリーナ礼拝堂の隣りにある、「ボルジアの間」というのを見たいと思っていた。塩野七生さんのチェーザレ・ボルジアを取り上げた小説を読んで、この悪徳を極めたルネサンス人に興味を持ったからである。

もっとも、自分の政治目的達成の為の殺人を「悪徳」と言うと、塩野さんには、全然分っちゃいないと言われるかも知れない。私は、チェーザレ・ボルジアに興味を持ったというよりも、こういう、目

的の為には手段を選ばず、殺人を平気で行うような男に惚れ込んだ、塩野七生という女性に興味を持ったのかも知れない。

このチェーザレ・ボルジアの父親の法王アレッサンドロ 6 世が住んでいたという部屋を見ようと思ったのだが、見そこなってしまった。どうも、順路が二つに分かれていたところで、別の方へ行ってしまったようだ。後で気がついたが、大変な人で、流れに逆らって戻るのは到底無理なのであきらめた。

ヴァティカン美術館の入口のところには、新しく食堂やトイレ等が整備されていたが、見たいところだけさっと見たい人にはかえって不便になってしまった。しかし、ミレニアムでやって来る大量の観光客をさばく為には、これもやむを得ないのかも知れない。

ヴァティカン美術館にはローマ時代の彫刻がたくさん陳列されている。私は、彫刻の実物を見るときは、正面からだけでなく、横や後ろからもできるだけ見るようにしている。正面からのものは美術全集でも見られるが、横や後ろからの姿は一般に実物でしか見られず、そこに新発見があることもあるからだ。

例えば、有名な「ラオコーン」を左右両側から見ると写真のように見える。

城壁と城門

ヨーロッパの町には、今でも城壁や城門が残っているところが多い。ローマもそうである。このヨーロッパ最古の大都会の城壁や城門はどんなものだったのだろうか？ 地下鉄でローマの町の南端のピラミデ駅に行ってみた。

ここには、ローマの南の出入り口であるサン・パオロ門とそれにつながる城壁がよく残っている。空港からタクシーでローマ市内に入る時もここから入った。城門やその隣にあるピラミッドがライトアップされていてきれいだった。

前にローマに来たときに、北端のピンチアーナ門に行ったことがある。その時はこの門のそばのホテルに滞在していた。地図で測ると、これら二つの門の間の距離は 3.7 キロメートルしかない。新橋から秋葉原ぐらいである。歩いて 1 時間で行けただろう。全ヨーロッパを支配していた大都会といっても、こんなものだったのだ。

ヨーロッパ人にとってのローマ

前にゲーテの「イタリア紀行」を読んだときに、フィレンツェには 1 泊もせず、さっと見ただけで、ただひたすらにローマにあこがれ、ローマへの道を急いだのに大変驚いた。ゲーテはルネサンスの美術には興味がなかったのだろうか？ いや、そうではない。ローマではルネサンスの美術品をずいぶん見てまわっている。

とにかく、1 日も早くローマを見たいという気持ちでいっぱいだったのだろう。あこがれのローマが日一日と近づくと、そわそわうきうき、フィレンツェどころではなかったのだ。ヨーロッパの人にとって、ローマはそれぐらい心の奥の重たい存在なのだと思う。

全ヨーロッパがローマ帝国の一部だったこともあるのだ。後にできた「神聖ローマ帝国」はローマとは関係がないのに何故こういう名前になったのだろうか？ 多分これは「ヨーロッパ統一帝国」というほどの意味だったのだろう。そういう意味では、現在の EU は「新

ローマ帝国」と言ってもいいのかも知れない。今回の「新ローマ帝国」にはローマも含まれている。

しかし、イタリア統一後、1871年にローマに首都が定められたときには、ローマは廃虚に近い荒れようで、市内を羊がさまっていたという。

そうかも知れない。4世紀に西ローマ帝国の首都がミラノに移って以来、ローマは法王の門前町で、政治や経済の中心ではなかったのだ。新しくイタリアの首都になるまでに、教会関係の建物は別にして、約1,500年間のブランクがあったのだ。

現在大統領官邸に使われているクイリナーレ宮も、国立博物館に使われているマッシモ宮も、美術館に使われているバルベリーニ宮もすべてローマ法王の棲家だったのだ。そしてトレヴィの泉もナヴォーナ広場もローマ法王が作らせたものだという。

古代ローマと法王の門前町とイタリアの首都と三重構造の町。それがローマだ。

アッシジ

途中下車の旅

ローマに 3 泊して、鉄道でフィレンツェに移動した。その途中、アッシジとペルージアで途中下車して町を見た。

今回は 6 日間で合計 10 回イタリアの国鉄に乗った。イタリー・フレクシー・レイル・カードという何日間か乗り放題の切符があり、われわれは 1 等の 4 日間のものを利用した。利用する日は連続してなくてもいいので便利だ。

利用した列車の種類は、ES (EuroStar)、IC (InterCity)、IR (Interregionale)、R (Regionale)、の 4 種類だった。

1 等はそんなに混まないとは思ったが、立っているのはいやなので、座席予約ができるものは予約することにした。

ES は新幹線のようなもので、全席予約が必要、IC は急行で予約も可能、R は各駅停車で予約はできなかった。

IR はいわば準急なのだが、これの予約の可否がよく分らなかった。Thomas Cook の時刻表には「1 等のみ予約できる」と書いてあるのだが、旅行会社や娘の知人でイタリアに住んでいた人に聞いたらできないと言う。はっきりしないので、現地で直接確認することにした。

ローマの駅で聞いたら、やはり予約はできないとのことだった。Thomas Cook の記事が間違いなのだろうか？ それとも、見たものが「2000 年夏用」なので、季節によるのだろうか？

イタリアの国鉄のホームページを見ると、IR には予約の記号がつ

いてなかった。今はこれが一番確かなのかも知れない。フィレンツェからボローニャに行くのに、Thomas Cook に出ない列車があることがホームページで分り、時間的に便利だったのでそれを利用した。

私が使った Thomas Cook には「2000年9月23日まで有効」と書いてあり、イタリアへ行ったのは10月なので、時刻表が違っているとも言えない。ただこれからインターネットがもっと普及し、ホームページも見やすくなると、印刷物の時刻表は要らなくなるだろう。何せ、インターネットを使えば、無料で最新情報が見られるのだ。

ホテルをあまり移りたくなかったので、ホテルは3箇所だけにし、途中下車をもっぱら利用した。しかし、重たいスーツケースを持って何回も途中下車するのは楽ではなかった。日本の鉄道と違い、車両の床がプラットホームよりはるかに高く、また駅の階段にはエスカレーター等まったくない。スーツケースを携えての昇り降りには閉口した。

各駅には日本と同じような手荷物の一時的預かりがあるので、どこでもそれを利用した。あまり旅行者が利用しているような気配がなかったが、みんなどうしているのだろうか？ やはりバスツアーで来る人が多いのだろうか？

道に迷ったおかげで

アッシジは12～13世紀頃の修道僧、聖フランチェスコが生まれた町である。山の上にある小さな町で、サン・フランチェスコ教会とそれに関連するものしかないようだ。日本で言えば門前町である。

ここでは、あまり時間もないので、この教会だけ見ればいいと思っていた。ところが、失敗してしまった。

ここへ来る人はみんなこの教会へ行くのだとばかり思っていたので、バスを降りると、みんなが歩いていく方向へついて行った。急な登り坂が厳しかったが、教会は高いところにあるものと思いこんでいたので疑いもしなかった。しかし、いつまでたっても教会は現れず、そのうちだんだん人も減ってきて、とうとう町の外れに出てしまった。

しかたがないので人に聞くと、今来た道をずうっと戻れと言う。何と教会はバスの終点からすぐのところにあったのだ。

いい加減な地図しか持ってなかったので、人について行けばいいと思ったのが間違いだった。

しかし、間違っただけでアッシジの町を一通り見ることができた。車がやっと通れるくらいの狭い石畳の坂道の両側に、古い建物がびっしりと建っていた。ホテルやレストランの行き先表示が多い割には肝腎の教会の表示は少なく、これを見落としてしまったようだ。あまりにも有名で、表示の必要もないということなのだろう。

サン・フランチェスコ教会

この教会はジョットの壁画で有名である。聖フランチェスコの一生を描いたフレスコである。97年の地震でだいぶ傷んだらしいが、すっかり修復されていた。

ジョットは13世紀末から14世紀始めにかけて作品を残した人で、ルネサンスの初期に入れられるようだが、私にはまだ中世の匂いの

方が強く感じられる。人物の表情も少なく、まだ中世的だ。専門家が見れば、そこにルネサンスの胎動を感じるのだろうが、私にはよく分らない。

聖フランチェスコの伝記を読んだことがある人は、それぞれの絵の意味が分るのだろうが、私は小鳥に説教したという話ぐらいしか知らないので、あまり興味も湧かない。

しかしこういう絵は、日本にもしょっちゅう来る印象派の絵などと違い、ここへ来なければ絶対に見ることができないことだけは確かである。

ペルージャ

山の上の町

ペルージャもアッシジと同じように山の上に作られた町である。と言っても、アッシジは人口 25,000 人の、教会の門前町だが、ペルージャはウンブリア州の州都で、人口 14 万人のかなり大きな都会である。

海拔は 493 メートルだそうで、鉄道の駅からバスで 15 分ぐらい山道を登ったところにある。まわりにいくらでも平地があるのに、どうしてこんな山の上の不便な所に町を作ったのだろう。鉄道の駅とか自動車道路へ出るのに大変だ。

ガイドブックによると、もともとはエトルリア人の要塞だったそうで、山の上に要塞を作るのはエトルリア人の常だったという。いつ町ができたかははっきりしないが、紀元前 6 世紀ぐらいだという。それ以来ずっとこの不便なところに住み続けてきた保守性には驚かされる。ずっと住んでいれば、住めば都で、いい点もあるのだろう。

中世そのままの街並み

町の中心に、11 月 4 日広場という広場があり、そのまわりに大きな宮殿や教会がある。広場からちょっと奥に入ると、古びた街並みが出る。多分何百年も前のままだろう。中世の町に迷い込んだみたいだ。時間が許せばスケッチをしたいところだった。

広場の宮殿はプリオリー宮と呼ばれ、現在は市庁舎と美術館に使われている。

美術館を見た後、ジェラート屋でイタリアのアイスクリームを買って食べ、タクシーで駅に戻ろうとしたら、いくら待ってもタクシーが来ない。予定のフィレンツェ行きの列車に間に合わなくなりそうではらはらした。これを乗り過ごす、もうその日はフィレンツェ行きがないので、ペルージャで泊まらなければならなかった。

やっと来たタクシーに乗り、運転手に急いでもらったら、バスとは違う近道を行ってくれて、予想より早く駅に着き、どうにか列車に間に合った。

何とも交通が不便な町だということをも身を持って実感した。

フィレンツェ

テンカンの学会とぶつかる

ヨーロッパの町で、場所も価格も適当なホテルを予約するのはなかなか難しいことがある。そのため、ホテルはかなり前から予約していた。ところが出発間際になって、フィレンツェのホテルがダブルブッキングで駄目になったと旅行会社から連絡があった。

代わりのホテルを捜してもらったが、適当なのがなく、部屋が小さく、バスタブも半分の部屋にしか付いてなく、あとの部屋はシャワーだけというホテルしか取れないという。しかたがないので、小さい部屋で我慢することにし、バスタブ付きの部屋を頼んだが、それも保証できないという。

どうしてそんなに混んでいるのかと聞くと、何か催し物があるらしいが、何かは分らないと言う。

電話で何回も聞いていたら、そのうち、

「分かりました。だけど読めません」

と言う。いったい何だろうと思っていたら、そのうちに、

「分かりました。テンカンの学会だそうです」

と言う。「癪癪」をちゃんと読めた人が近くにいたらしい。

この学会のために、フィレンツェ中のホテルの値段が上がってしまい、予約も難しくなってしまったのだ。変なものにぶち当たってしまったものだ。

しかしフィレンツェ市内のホテルを取れた人はまだいい。昼食を摂ったレストランでたまたま隣り合わせた、ツアーで旅行中の日本

人のカップルは、市内に宿泊できず、車で1時間近くかかるところに泊まらされていると言っていた。

われわれが泊まったホテルは、確かにスーツケースを広げると足の踏み場もないほど狭かったが、駅のすぐそばで交通の便は非常によかった。ローマからフィレンツェに移動する日の朝、ローマのホテルから電話を入れて、バス付きの部屋を頼んでおいたらそうしてくれたので助かった。やはりバスに浸かった方が疲れが取れる。

お化粧中のドゥオーモ

フィレンツェへ着いた次の日は、何はともあれ先ずウフィツィ美術館へ行こうと思った。フィレンツェは小さな町で、ホテルから美術館までたいした距離はないので町を見ながら歩いて行くことにした。

ローマは快晴で暑く、半袖のシャツの人も大勢いたが、フィレンツェは雨で肌寒かった。大変な違いだった。

途中にドゥオーモの大きい建物があつた。この建物は、表側は最近清掃したのかきれいだったが、裏側はきたなく、足場が組んであつた。現在お化粧の途中なのだろう。

私は、あまりにきれいにしたものより、古びていて歴史を感じさせるものの方が好きなのだが、この人にはそうもいかないのだろう。何せ歴史的建造物であると同時に現役の教会でもあるのだ。

前売券でウフィッツィ美術館を見る

ウフィッツィ美術館の前には、驚いたことに、大変な行列ができていた。聞くと、中に入るまでに2時間はかかるという。パリのルーブル等いつもがらがらのようなのだが、これはまた何としたことだ。

あとでフィレンツェのレストランで働いている日本人の女性に聞いたら、混むときは混んでいるが、そのうちがらがらに空いてしまうという。やはりシーズンによるようだ。

美術館の人に聞くと、前売券があって、それを持って指定された時間に来ればすぐ入れてくれるという。仕方がないので前売券を買って次の日に見に来ることにした。

翌日はピサに行き、夕方ピサから帰ったあと再度ここに来た。その日も行列ができていたが、前売券を持っていたのですぐ入れてくれた。

美術館の中も人でいっぱい、ゆっくり見られなかった。落ち着いて見ることができないので、ボッティチェリとラファエロとティツィアーノだけしっかり見てあとはざっとしか見なかった。

もっと空いているときに来て、ゆっくり見たいものだと思った。前売券で美術館を見たのは始めてである。

フラ・アンジェリコの修道院

ウフィッツィ美術館が満員で入れなかったため、サン・マルコ修道院にフラ・アンジェリコの壁画を見に行った。フラ・アンジェリ

コはこの修道院の修道僧で、廊下や各個室（英語で cell）の壁にフレスコを描いたという。

個室が並んでいる 2 階の廊下に、有名な「受胎告知」がある。受胎を告げる天使は何という穏やかな顔をしているのだろう。まるで東洋の仏像のようだ。これが描かれたのは 15 世紀の半ばだということだが、中世の絵には見られない人間らしい表情を見ることができる。そして全体の淡い中間色は日本画を思い起こさせる。

43 ある個室には一つずつフレスコが描かれている。キリストの生涯のいろいろな絵であるが、磔にあって心臓から血が吹き出ている絵が多い。修道院の個室では昼だけ修行していたのか、夜も寝泊まりしていたのか、私は知らないが、血が吹き出ているキリストの絵を朝晩見て暮らした修道僧はどんな気持ちだったのだろうか？

15 世紀の末にはサヴォナローラがここの修道院長を務めていたという。メディチ家やローマ法王を非難する激烈な説教をして、最後にはウフィッツィ美術館の前のシニョリーア広場で火刑に処せられたという男である。このサヴォナローラの部屋が現在もちゃんと残っている。

あの穏やかなフラ・アンジェリコの天使の顔を毎日見て暮らした男が、火のような説教をして最後は火あぶりになったとは、どう考えたらいいのだろうか？ 日本でも、毎日仏像を眺めていたはずの坊主が、謀反を企てて島流しになっているのだから、別に驚くことはないのだろう。

「芸術の無力」を感じざるを得ない。

恐怖の三段腹

サン・マルコ修道院のあと、メディチ家代々の当主が葬られているメディチ家礼拝堂に行った。石棺を飾るミケランジェロの彫刻が有名なところである。

写真では見たことがあったが、男女の裸像を間近に見ると、実物よりはるかに大きく、すごい迫力である。

特にジュリアーノ・デ・メディチの棺の上に横たわる裸婦はスポーツ選手のように筋肉が盛り上がり、腹のところの筋肉が何段にもくびれて、いわゆる三段腹になっている。そういう意味では元スポーツ選手と言うべきかも知れない。棺の上にこんな女に寝そべられて、ジュリアーノさんはどんな気持ちなのだろう？

男の裸像にはどれにも、股間の「いちもつ」の克明な複製がついている。ここのものに限らず、ミケランジェロのダヴィデ像を始めみんなそうだ。東洋人とはちょっと感覚が違う。これも元はギリシアの文化だ。

店屋でこの部分の拡大写真を集めて1枚に印刷した絵葉書を買っていた。まさにチン列である。真ん中に、ひとときわ大きいダヴィデの「もの」があって、赤い丸で囲んで「Wow! David!」と書かれていた。

買って帰ろうかと思ったが、女房や娘がコ　　ンすると困るのでやめた。英語で書かれていたのは、こんなものを喜んで買うのはアメリカ人ぐらいということだろうか？

ミケランジェロの彫刻は、人物というより物理的な物体の複製としての見事さでわれわれを感嘆させる。ダヴィデの筋肉には静脈が

走り回っているのを始めて知った。

裏通りのスケッチ

私が好きな網干啓四郎さんという画家はイタリアが好きで、毎年のようにイタリアへスケッチ旅行に行かれる。この方が描かれたイタリアの古い街並みのスケッチを見て、私もこういう絵を描きたいと思っていた。

アッシジにも、ペルージアにも、フィレンツェにも、絵に描きたい古い街並みが残っていた。煉瓦が剥げた壁、石が崩れかけた門、擦り減った石畳の道。何百年も経った建造物が、特別な史跡としてでなく、ごく当たり前のように生活に供されているのは日本では考えられない。

フィレンツェで、女房が買物をしている間に、ドゥオーモの広場から1本裏通りに入ったところをやっと1枚描くことができた。

(スケッチ1)

「百人の乞食の食堂」

フィレンツェは、例のテンカンの学会のためか、ホテルだけでなくレストランも混んでいた。

東京にも何軒もあるサバティーニで食事をしようとしたが満席で予約できなかった。

ホテルのそばのレストランの Pasta がうまいとガイドブックに書いてあったので行ってみたが、予約してなければ駄目と断られた。いあわせた若い4人連れは、女2人は予約していたが、男2人が予

約していなかったので入れてもらえなかった。どうもその辺で知り合ったばかりのようだった。

ホテルの部屋から、なるべく地元の人が行きそうな、うまいものが食べられそうなレストランに片っ端から電話したところ、「Ostaria dei Cento Poveri（百人の乞食の食堂）」という変わった名前のレストランで10時からの席がやっと取れた。行ってみると超満員で、隣の席では地元の若者達が、もう相当アルコールも回って大騒ぎをしていた。名前の通り大衆的だった。

魚介類の料理が得意なようなので、ムール貝を頼んだ。スープがうまかったので、一滴も残さずパンで拭いて食べた。

厨房で東洋人の女性が働いていたので、英語を話すウェイトレスに、

「あそこで働いている東洋人の女性は日本人ですか？」

と聞くと、やはりそうで、仕事が終わってから席に呼んでくれた。

日本で銀行に勤めていたが、辞めてここに来たんだという。厨房の仕事は忙しくて大変だと言っていた。われわれの娘も1年間フランスのケーキ屋で住み込みで働いていたので、大変なことはよく分ると話した。

日本にご両親がいるのだが、電話は高く、郵便は非常に時間がかかるので、滅多に連絡してないと言う。そこで、女房が電話番号を聞いて、帰国後お母さんに電話をかけて様子を伝えてあげた。突然知らない人から電話がかかってきてさぞ驚かれたと思うが、話を聞いて、安心して喜んで頂けたようだ。

ピサ

斜塔の町

フィレンツェから日帰りでピサに行った。フィレンツェを流れるアルノ川に沿って鉄道で約1時間行くと、地中海の河口に近いピサに着く。列車は各駅停車で、田園地帯をのんびりと走る。

ピサでは何はともあれ有名な斜塔を見に行った。

斜塔はドゥオーモや洗礼堂とともに市街地の外れの城壁のすぐ側にある。斜塔はもともとドゥオーモに付属する鐘楼として建てられたものだろう。

これらの建造物があまりにもきれいなのに先ず驚いた。他にあまり産業もなく、観光が最大の収入源なので、金をかけてピカピカに磨いているのだろうか？確かに、町が小さく、静まり返っているわりには、この一角だけは観光客と土産物屋でごったかえしていた。

しかし、このように人工的にきれいにしたのはあまり好きではない。自然のままに古びていた方がいい。

斜塔は今にも倒れそうで痛々しい。基礎を補強し、倒れそうな方向と反対の方向に鉄のワイヤで引っ張っている。大変な騒ぎだが、これが倒れるとピサの町も倒れてしまうかも知れない。

露天商の列

駅から斜塔へ行くときはバスで行ったが、戻るときは街並みを見ながら歩いた。

駅へ向かう道には何 100 メートルにも渡って、露天商が店を並べていた。露天といっても大型のテントのかなり本格的な店である。売っているものは、日用雑貨、アクセサリー、古道具、古本、古レコードと実にさまざまである。

古本といっても、何 10 年も店先に置いてあるようような、ポロポロで手に取ったらバラバラに崩れそうな本が並べてある。こんなものを買う人がいるのだろうか？ 店屋はいっぱいあるが客はほとんどいない。店屋の人はみんな手持ちぶさたで暇そうだ。商売が成り立っているような気がしない。いったいどうやって食べているのだろうか？

こっちは他人事ながら心配になるが、彼らはいたつてのんびりと隣同士でペチャクチャやっている。

ボローニャ

もうひとつの斜塔

フィレンツェからヴェネツィアに鉄道で移動した日には、ボローニャとフェラーラで途中下車して町を見た。

ボローニャでは、駅から町の中心地までインディペンデンツァという大通りを歩いたが、通りの両側には大きいビルが建ち並び、活気に満ちていた。人口は約40万人というからイタリアでは大都会だ。

町の中心の近くに斜塔があった。斜塔はピサだけかと思ったらここにもあるのだ。ただピサの斜塔は水平面が円形だが、このものは正方形である。両方とも12～13世紀頃の建築らしく、その頃のイタリアの建築技術の限界を示しているのだろうか？ ピサと違いこのものは傾きが少ないのか、補強工事などはしてないようだった。

バッグとドライ・トマト

娘にフルラというブランドのバッグの買物を頼まれていたのだが、ローマの店では品切れだった。何せ娘の注文はブランド、大きさ、形、色とも指定なので、頭は使わなくて済むが、探すのが一苦労だ。もっともこれはもっぱら女房の仕事なのだが、店屋まで連れて行くのと通訳の仕事は私に降りかかってくる。

ボローニャの街を歩いていたらフルラの店があったので入ってみた。ローマでもなかったものがこんなところにあるとは思わなかつ

たが、ショーウィンドーの似たような品物を二つ指して、

「この形で、この色」

と言うと、意外にも奥から出してきた。

今回はデジタルカメラを持ち歩いてしたが、持っていた 3 枚のスマートメディアを使い切ってしまった。もう 1 枚買おうと、大きい電気屋かカメラ屋がないか捜しながら歩いた。

大きな電気屋があったので入って聞くと、そこに品物があった。ただアメリカの製品だったのでカメラとの相性を心配すると、包装を開いて試させてくれた。写してみると問題はなかった。スマートメディアの互換性は全世界で問題がないようになっているのだろうか？ この店の女性は英語ができたので助かった。

さすがに大都会だけあってボローニャには何でもあると思った。

ボローニャではもうひとつ買物をした。

イタリアの食材を何種類か買う予定をしていたが、その中にドライ・トマトがあった。街角に小さな食料品店があったので、こんなところで売っていそうだと思ったが、ドライ・トマトをイタリア語で何というのか知らない。それどころか私は見たこともなく、ドライ・トマトという言葉が正式な英語かどうかも知らない。

試しにイタリア語で、

「乾いたトマト (pomodoro secco) ? 」

と言ってみると、トマトを日干しにてからからにしたものを見せてくれた。女房がこれでいいと言うので、それを買った。

先日娘が料理してくれたが、ニンニクを混ぜてペースト状にしたものがうまかった。

食材としては、この他に、フィレンツェでポルチーニというきのこを買い、ヴェネツィアではオリーブオイルとパスタを買った。

フェラーラ

月曜日は駄目よ！

ポローニャのあと、フェラーラで再度途中下車した。ここはルネサンス期にエステ家が治めていたところである。

塩野七生さんの小説に「ルネサンスの女たち」というのがある。

この小説が取り上げているイザベッラ・デステはこのエステ家の出身で、マントヴァのゴンザーガ家に嫁ぎ、夫がヴェネツィア軍の捕虜になったとき一人で国を守ったという。

またその妹のベアトリーチェはミラノのスフォルツァ家に嫁いでいる。

同じく小説に取り上げられているルクレツィア・ボルジアは、チェーザレ・ボルジアの妹で、3度目の政略結婚でエステ家に嫁がされたという。

要するにフェラーラのエステ家はルネサンス期に、政略結婚を含めて、他国と権謀術数を極めた覇権争いをした国のひとつなのだ。

ここではエステ家の城を見たいと思っていたが、あいにく月曜は休館日で見られなかった。城だけでなく宮殿も美術館も全部休みで入れなかった。

「月曜日は駄目よ！」である。

足裏マッサージに最適

建物の中に入れないので、外から見て歩いた。

エステ家の城は濠で囲まれている。これは日本ではごく普通だが、ヨーロッパでは珍しい。ヨーロッパでは、町のまわりには城壁や濠があるが、王や領主の屋敷のまわりには何もないのが普通だ。パリ、ウィーン、ミラノ、フィレンツェみんなそうだ。

ガイドブックによると、このような濠を作ったのは、この城が建てられた14世紀に、重税に苦しんだ住民が反乱を起こしたためだという。エステ家は他国からフェラーラを守ると同時に、自国の住民からも自分の屋敷を守る必要があったようだ。

フェラーラには古い街並みがよく残っていた。建物だけでなく道路も昔からの狭い石畳の道がそこらじゅうにあった。

ディアマンティ宮から城へ向かう道は、丸い石が一面に敷き詰められていた。車で通るときはさぞ乗り心地が悪いだろう。歩いても歩きづらいが、歩くついでに足裏マッサージができるので、健康にはいいかも知れない。

ヴェネツィア

車がない町

フェラーラを出た列車は真っ平らなロンバルディア平原をヴェネツィアに向かう。ヴェネツィアに着いたときは、もう日も暮れて真っ暗だった。

先ずヴェネツィア・メストレ駅に着く。しかし、慌ててここで降りてはいけない。ここを出た列車は、海の上の鉄橋を約10分間走り、終点のヴェネツィア・サンタ・ルチア駅に着く。

そう、ヴェネツィアはまったくの島なのだ。島国ならぬ、「島都市」なのだ。どうしてこんな交通が不便なところに大都会ができたのだろう。

駅へ着いたら、ホテルまでどうやって行ったらいいんだろう。タクシーはないらしい。水上バスでホテルの近くまで行って、あとは歩くのが安そうだが、船着場からホテルまでの道が分からないし、どれぐらいの距離かも分からない。

水上タクシーというのがあるらしいが、金がかかるようだし、だいたいホテルに横付けしてくれるのだろうか？ 変な所で降ろされて、あとは歩けと言われても困ってしまう。

列車の中でさんざん迷ったが、夜も遅く、早くホテルに着きたかったので、水上タクシーで行くことにした。タクシー乗り場の船頭に、サン・マルコ広場のそばのホテルの名前を言って、いくらだと聞くと、10万リラ（約5,000円）だという。法外な値段ではなさそうなので、それで行くことにした。

あたりが真っ暗でよく分らなかったが、始めは広い運河を水しぶきを上げてどんどん行った。しばらく行くと、狭い運河に入り、最後の方は、ボートがやっと入れるぐらいの狭い運河を、徐行運転でそろそろと行った。角を曲がる時は船体を岸壁の角に押し当てて、無理矢理方向を変えてボートを進めた。

着いたところはホテルの入口の真ん前だった。ヴェネツィアではホテル等の大きい建物はすべて運河に面しているようだ。何せ、船以外に交通機関がないのだからそうでないと大変だ。重たいスーツケースを引きずって歩く心配はいらなかったのだ。

狭い運河を、苦心惨澹してホテルの前まで送ってくれた船頭さんの苦勞に感謝して1万リラ(約500円)のチップを渡した。しかし、彼らにしてみればこんなことは毎日何回もやっている当たり前のことなのだろう。

それにしても、何と交通が不便な町なのだろう。

「海の都の物語」

ヴェネツィアは何とも不思議な町である。

どうして海の中の狭い島に住む必要があるのだろうか？

町の中は、運河と狭い道路が縦横に入り組んでいる。船を通すために橋がみんな中央部分が高く、階段で昇り降りするようになっているため車は通れない。どうして高架の平らな道路を作らないのだろうか？人の移動は別にしても、商品や建築資材の運搬が全部船では不便で能率が悪いだろう。

塩野七生さんの小説に、ヴェネツィアの歴史を扱った「海の都の

物語」というのがある。どうもよく分らないことが多いので、帰国後読み返してみた。

それによるとヴェネツィアは、もともと本土に住んでいた人が、5世紀にフン族やロンゴバルド族に追われて島に住み着いたのだという。好き好んで最初から島に住んでいたわけではないのだ。

当初は、まともな島であるリド島の一部の、マラモッコというところに住んでいたが、9世紀にフランク族の海軍に攻められて、船で一番攻めづらい潟（イタリア語で *laguna*、英語で *lagoon*）の中央の小島が集まったところに逃げ込んだのだという。そこが現在のリアルト橋のあたりだそうだ。

フランク族と戦うと見せかけてそこから船を出し、潮が引き始めると退却し、追って来たフランク族の大きな軍船が干潟で動きが取れなくなると、火矢攻撃を仕掛けて全滅させたのだそうだ。

ヴェネツィアはまともな島ではなかったのだ。そして大量の土砂を運んで埋立て工事ができる時代でもなかった。そこで、仕方なしに、海面すれすれのところに家を建てたのだ。

この本は、木材を埋めて基礎を作り、その上に家を建てた方法を図入りで詳しく説明している。これほど戦争と土木工事が好きな女性には他に知らない。

ヴェネツィア成立の謎は、この本を読んでだいぶ分ったが、それにしても、軍事上の必要性がなくなってもここに住み続けている執念には驚ろかされる。しかしペルージャの人のように 1,000 年以上も山の上に住んでいる人もいるので、別に驚ろくには当たらないのかも知れない。

こういうところに住み続けるのは、今後 100 年経ってもおそらく変わらないのだろう。こういう点についてはイタリア人はおそろし

く保守的なようだ。

しかし、現在のヴェネツィアの人口約 30 万人のうち、島の人口はだんだん減って約 10 万人で、あとは本土に住んでいるという。やはり島はビジネス活動には不便なのだろう。

沈みゆく町

ヴェネツィアへ着いた翌日は、先ずホテルに近いサン・マルコ寺院へ行った。その前が広々としたサン・マルコ広場なのだが、何と水浸しだった。

前の日の夜、夕食の後にちょっと来たときはからからだったが、一面に深さ 10 センチから 20 センチぐらいの水が覆っている。潮の満ち干で変わったのだろう。

観光客が歩けないので、高さ 40 センチぐらいの鉄の骨組みの上に、幅 1.5 メートルぐらいの板を並べて渡してある。観光客はその上を歩いている。板の上は大変な混雑で、容易に前へ進めない。

この鉄骨と板は、水が引くたびに通行の邪魔になるので片付けるのである。毎日大変な手間だ。

昔はこんなことはなかったようだが、いつ頃からこうなったのだろう。運河に面した家を見ると、1 階の玄関のドアの下の方が海水で洗われている家や、入口の階段の途中まで水が来ている家が多かった。

地盤が沈下したのだろう。今後どうになってしまうのだろう。

平凡社の「世界大百科事典」によると、ヴェネツィアの水没は、ユネスコやイタリア政府も力を入れている大問題だそうで、地盤沈

下防止のため、本土側でも地下水の汲み上げが禁止されているのだそうだ。

事態は相当深刻なようだ。ヴェネツィアへ行くなら早く行った方がいい。そして、サン・マルコ広場は干潮時に行った方が無難である。

ティントレットの美術館

ローマは暑くて、半袖のシャツの人も多かったが、ヴェネツィアは天気が悪くて寒かった。日本を出る前にインターネットで温度を調べ、普通のジャケットだけ持って来たが寒くて仕方がない。しょうがないのでリアルト橋のそばのデパートでセーターを買った。同じイタリアでもずいぶん違うものだ。

交通機関はもっぱら水上バスを利用した。3日間乗り放題のチケットが35,000リラ（約1,750円）なので、市内をあちこち行くには便利だ。地元の人でも通勤や買物にみんなこれを使っているようだ。

この水上バスで3日間に渡って、アカデミア美術館、サンタ・マリア・デッラ・サルUTE教会、サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会等を見てまわったが、一番印象に残ったのはスクオーラ・ディ・サン・ロッコである。

この建物は部屋中がティントレットの油絵で飾られていて、いわばティントレットの美術館である。しかし、ティントレットの絵を集めて来て飾ったわけではない。すべての絵はこの建物のためにティントレットが描いたのである。そういう意味では、ヴァティカンのシスティーナ礼拝堂のミケランジェロ、フィレンツェのサン・マ

ルコ修道院のフラ・アンジェリコと同じである。これらと違うのは、ここの絵がフレスコではなくて、カンヴァスに油彩で描かれている点である。

スクオーラというのはキリスト教の活動をしていた市民の組織だという。そして、スクオーラ・ディ・サン・ロッコはヴェネツィアに六つあった大きいこういふ組織の一つだという。

この建物はその組織の集会場だったのだろう。そこがティントレットに絵を発注したのだ。従って、絵はすべて聖書を題材にしたものだ。

ここの絵は、1564年から1587年にかけて描かれたという。ティントレットが生まれた年はっきりしないが、1594年に75歳で死んだという記録から逆算すると、1518年か1519年だという。従って、45歳頃から68歳頃にかけて描かれたことになる。円熟期に20年以上、全精力を傾けて描いた作品群といえるだろう。それだけに見ごたえがある。

一番大きい「磔」の絵は幅が12メートルもあり、何十人もの人が描かれているが、その一人一人が立派な肖像画になっているのに驚ろかされる。巨大なエネルギーが充満しているような絵だ。そういう絵が数十枚、壁をぎっしりと埋めているので圧倒される。

アカデミア美術館は満員で30分近く外で待たされたが、ここはあまり人気がないのかがらだだった。しかし、ヴェネツィアへ行ったらここだけは見逃さない方がいい。

イタリアのウナギ

旅行中は毎日イタリア料理ばかり食べていた。なるべく観光客が行かないような店で、好きな魚介類が食べられそうな店をガイドブックで選んで予約した。ローマでは「アルベルト・チャルラ（Alberto Ciarla）」という店で日本の伊勢エビに近いアラゴスタとガンベリという小型のエビを食べた。フィレンツェでは前に書いたようにムール貝を食べた。

ヴェネツィアの最初の夜は、着いたのも遅く、予約する時間もなかったので、ホテルのそばのレストランに行った。メニューに「エビをオリーブ・オイルとレモンで味付けしたもの」というのがあったので、それを注文した。すると驚いたことに、皿いっぱい茹でたエビとオリーブ・オイルの瓶とレモンを持って来た。勝手に味をつけて食べ、というのである。まったくあきれたものだ。しかし同じ店で頼んだ鱈はちゃんといい味がついていてなかなかうまかった。

同じ店でもこうも違うものかと思った。これでは星の数等つけようがない。こういうバラツキが大きい店は駄目で、何を食べてもうまいのが三つ星レストランかも知れない。しかし、そうは言っても同じレストランでも料理によるバラツキが大きいと思うので、レストランの格付けはあまり当てにしない。

ヴェネツィアでは「ダ・フランツ（Da Franz）」という町外れにある、あまり旅行者が行きそうもないレストランに行ってみた。水上バスを近くの船着場で降りると、住宅街なのか真っ暗で何も分らない。

しかも道路の名前が、地図は「Giuseppe」なのだが現地の表示は「Isepo」と書いてあり、どうも違っているようだ。これは後でレストランで聞いたら同じことなんだそうだ。まったく旅行者泣かせだ。

たまたま女性が一人歩いて来たので、その人に聞いてやっとレス

トランにたどり着いた。

店は空いていて、常連客らしいのがウェイターと話し込んでいた。

「イタリア語と英語とどっちにしますか？」

と聞くので、メニューが2通りあるのだと思い、

「英語をお願いします」

と言うと、何と書いたものは何もなく、全部口で言うのである。書いたメニューが一応あって、メニューにない本日の特別料理を口で補うのは普通だが、何もなくて始めから全部口で言うのは、言う方も聞く方も大変だ。聞き終わった頃には始めのものは忘れてしまう。

もうエビも貝もいろいろ食べたので、何にしようかと思っていたら、ウナギがあるというのでそれを食べてみることにした。さすがにイタリアだけあって、茹でたウナギをトマトで味付けしたものだ。決してまずくはなかったが、ウナギはやはり日本の蒲焼きの方がうまいと思った。彼らに日本の蒲焼きを食べさせたらどっちがうまいと言うだろうか？

この料理は、このレストランの腕を知る上では、最良の選択ではなかったかも知れない。

スケッチも楽ではない

ヴェネツィアでは見物の合間にスケッチを2枚描いた。1枚はサン・マルコ広場のそばの岸壁から対岸のサン・ジョルジョ・マッジョーレ教会を描いたものである。(スケッチ2)

今にも雨が降って来そうな天気だったので、普段より急いで描い

ていたら、案の定雨が降り出した。幸いにしてほしい描き終わっていたので、大急ぎで仕上げた。普通は 1 時間かけるのだが、この時は 40 分で描き終えた。最後の方は小雨の中だった。

翌日水上バスでこの教会に行ってみた。塔の上からの眺めがよさそうなので、エレベーターで登った。エレベーターを運転していた牧師が、

「もうじき鐘が鳴ります」

と言う。

塔の上で、素晴らしい眺めを見ていると、突然耳元で大音響が響き出した。事前に聞いてなかったら腰を抜かすところだった。

もう 1 枚のスケッチは、われわれが泊まっていた小運河沿いのホテルを描いたものである。(スケッチ 3) これは最終日に空港行きの水上バスに乗る前にちょうど 1 時間あったので描いたものである。

小運河の岸の幅 1 メートルぐらいのスペースに座り込んで描いていた。すぐ近くに絵に描いた橋があったが、反対側は運河の上をふさぐように建物が建っていたので、行き止まりだとばかり思っていた。

ところがそこから突然怖い顔をしたおばさんが出て来て、大声で文句を言いはじめたので驚いてしまった。何を言っているのかわからないが、どうも通行の邪魔だからどけと言っているらしい。

行き止まりではなかったのだ。建物の下の高さ 1 メートルぐらいの隙間をくぐって、ここを通路に使っている人がいたのだ。

驚いてどいてあげたが、ヴェネツィアの裏町では、われわれには信じられないようなところが通路として使われているようだ。

ヴェネツィア語？

イタリア語をほとんど知らないのでよく分らないが、どうもヴェネツィアには独特の言葉があるようだ。もし見当違いの話があったらご容赦願いたい。

大きい運河は、普通のイタリア語と同じようにヴェネツィアでも「canale」というが、小さい運河は「rio」という。「rio」は「Rio Grande」等で使われるようにスペイン語で「川」だが、現在のイタリア語では「川」は普通「fiume」だ。

裏通りの細い道のことを「calle」というのもヴェネツィア独特のようだ。他の町では「via」とか「viale」が普通だろう。

他の町で「piazza」と呼ばれる広場のことをヴェネツィアでは普通「campo」という。「piazza」と呼ばれているのはヴェネツィアではサン・マルコ広場だけのようだ。ここは別格なのだろう。

元首のことを「Doge（ドージェ）」と呼んだ町は、ヴェネツィアの他にもあるのだろうか？

あまりにも有名な「gondra」はヴェネツィア独特のものだ。

前に書いたように、地図の道路名と現地の表記が違うところがあるようだ。これは「標準語」と「ヴェネツィア語？」の違いかも知れない。

どうもヴェネツィアは地理的にだけでなく文化的にも「島都市」のようである。

英語が商売道具

旅行先が大都市が多かったせいもあると思うが、予想以上に英語を話す人が多いのに感心した。

イタリアで合計 9 泊し、6 回の夕食を電話で予約した。満席で断られたものも含めると多分 10 回ぐらいレストランに電話したと思う。そのうち最初に電話に出た人が英語を話さなかったのは 1 回だけである。それもすぐ英語を話す人と替わってくれたので、英語で話ができなかったのは結局 1 回もなかった。

ホテルのレストランは 1 回だけで、あとはもっぱら地元の人が行くような店を選んだが、それでもこんな具合だった。

レストランでも、店屋でもだいたい若い人の方が英語ができる。

フィレンツェのレストランでは、若いウェイトレスは英語でできばきと外国人の要求をさばいていたが、年取ったウェイターは外国人に話しかけられそうになると逃げ回っていた。

これは郵便局でも同じだった。窓口の年配の女性に英語で話しかけたら、若い女性が替わって対応してくれた。

外国人に接する機会が多いはずなのに意外と英語が通じないのが鉄道の駅員である。年配の人が多いせいもあるだろうが、聞いていることとまったく関係ない答えが返って来たこともあった。

同じ鉄道でもローマの駅の窓口の若い女性はきちんとした英語を話した。

イタリアでも、英語を使わないと商売にならないという考えが広まっているようだ。商売の道具として若い人は英語を勉強しているのだろう。英語ができない年寄りには取り残されつつあるようだ。

小包の箱はどこで売っている？

買物をして荷物が増えたので、小包にして日本に送り返そうと思った。ホテルのフロントで聞くと、梱包用の箱と紐を郵便局や文房具屋で売っていると言う。郵便局はリアルト橋のそばにあるという。

そこへ行って聞くと、

「ここにはない、すぐそばの文房具屋で売っている」

と言う。そこへ行くと、そこのおやじは、

「ここにはない、郵便局にある」

と言って、人に腕を取って連れて行こうとするので、慌てて逃げ出した。

あとで、リアルト橋まで行かなくても、ホテルのそばに郵便局があることが分かったので、そこで聞いてみると、やはりないという。

女房が買物をした店の日本人の店員が文房具屋を教えてくれたので、そこへ行って見たがやはりないという。

仕方がないので、あきらめて、手で持って帰ることにしたが、いったいどうなっているのだろうか？ 専用の箱と紐があるという話が間違いで、みんな適当な梱包をして送っているのだろうか？ いまだによく分らないが、それにしても、みんな自信満々で教えてくれるのには感心する。

こうもいい加減な話をまともに信用していたら、大変なことになってしまうし、腹が立ってしょうがないだろう。よくもこれで日常生活が成り立ち、平和が保たれているものだと思う。

いや、これは日本人の基準で彼らの話を信用し、腹を立てる方が悪いだろう。

彼らがいくら自信たっぷりと話しても、簡単に信用してはいけな

い。そして他人の言うことは間違っている可能性があるという前提で行動し、たとえ間違っても決して腹を立ててはいけないのだ。

前には仕事でイタリア人と付き合い合ったことも多く、イタリア人のことを決して悪く言うつもりはないが、イタリア人と付き合いうときは、日本人はこれぐらいの考えを持たないとだめだろう。

これは善し悪しの問題ではない。文化の違いである。

パドヴァ

クリーンルーム並みの礼拝堂

ヴェネツィアから日帰りでパドヴァにでかけた。パドヴァまでは急行で 30 分ぐらいなので楽に行ける。

鉄道の駅から町の中心の方向に歩いていくと、古い城壁のようなものがある。これはローマ時代のアリーナの跡だそうだ。航空写真で見ると、現在は楕円形の壁だけが残っている。これは紀元 1 世紀に建てられたものだそうだ。パドヴァはローマ時代に大都会だったのだ。

このアリーナの跡に隣接してスクロヴェーニ礼拝堂がある。

この礼拝堂にはジョットの壁画があつてよく保存されているというので行ってみた。

入場券を買うと、何時何分に遅れずに入口に来てくれと言う。その間に、隣りの市立博物館をちょっと見て、指定に時間に礼拝堂の入口に行くと、集まった 20 人ぐらいの人がガラス張りの密室に入れられて、入口のドアが閉まってしまった。そこで 15 分間待たされた。

その部屋の壁には、いかに壁画の保存に力を入れているかをくどくどと書いた説明が貼られていた。この密室は外気を遮断するためと、衣服の埃を取り除くためにあるのだという。

散々待たされて、前の一組が礼拝堂から出てくると、第 2 の密室になっている廊下を通してやっと礼拝堂に入れた。いったん入ると、15 分間はジョットを見ていなければならない。一人だけ早く出るのは許されないのだ。

このジョットの壁画は、自慢しているだけにさすがにきれいだった。1305年前後に描かれたものだという。アッシジのサン・フランチェスコ教会のものは1290年から1300年にかけて描かれたというので、こっちの方が10年ぐらい後に描かれたようだ。アッシジのものは聖フランチェスコの伝記だが、このものはイエス・キリストの話である。

それにしても、保存に力を入れるのは結構だが、もう少し時間の効率も考えてもらいたいものだ。半導体を製造するクリーンルームの入口で使うエアシャワーのような装置を使えば、1分もかけなくてもきれいになるのと思った。

おかげでパドヴァでは他のところを見る時間がなくなってしまった。

おわりに

イタリアの町は、統一国家の形成が遅かったためか、今でもそれぞれ個性が豊かで面白い。そして、鉄道や車を使う現代の生活から見ればおよそ不便だと思うのだが、何百年も前とあまり変わらない町で今も生活していることに感心する。

イタリア人は男も女もおしゃれだ。休日に町をぶらついている男でもジャケットを着、ネクタイを締めている人が多い。身なりがきちんとしている割には、われわれ日本人から見ると、言うことがいい加減で、時間にもルーズだ。

しかし、言う方がいい加減なら、聞く方もいい加減なので、明るく楽天的で、何事にもフレキシブルなイタリアの社会の微妙なバランスが保たれているのだろう。旅行者がとやかく言う筋合いのものではない。あまり正確さや几帳面さを求めると、せっかくのイタリアのよさが失われてしまう。

前にもミラノとか北の方の町には行ったことがある。しかしナポリとか南の方には今回も行かなかった。南の方に行けばまた町の雰囲気も人の気風も違うのではないかと思う。

機会があったら今度は南の方に行ってみたいと思う。

(完)

2001年2月